
ニューヨーク・ラブストーリー/エピソード23:偽りの恋人 (Rescue Me)

栗須じょの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴーリーク・ラブストーリー」Hピソード23・偽りの恋人（

Rescue Me）

【ISBNコード】

N7954V

【作者名】

栗須じょの

【あらすじ】

「彼氏の振りをして欲しい」とローマンから頼まれるディーン。彼の母親がマンハッタンにやつてきたので、その場を誤魔化すため、恋人が必要なのだと言う。ディーンは嫌々ながらも引き受けるが、それは想像以上に大変なことで……。

(前書き)

前書き /

こちらは 一話完結のシリーズ物 について、ヘッソード第1話から
お読み頂けると分かり易いと思います。
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

友人 。

その定義は多岐に渡るが、およそ一般的には、互いに心を許し合ひ、対等に交る関係性のことを指す。相手の気持ちを思いやり、恋人ほどべったりはせず、適度な距離を保つて親しく付き合つ。そこに『無理難題をふつかけて困らせる』や、『異様なセクハラをしかける』などの類は入る余地がない。ましてや、相手の親切心について込んで、『己の目的のために利用するなどは、とても友達のやることではない。

これからおれが話すのは、それらを平氣でやつてのける、ひとりの友人について。見目麗しいが、心は小鬼と同等のローマン・ディステイニー。彼が「折り入つて話があるの」と、妙に真剣な口調で言つてきたら要注意だ。休日の午後、「うちで英國風のお茶しよ」と誘われるのもかなり危険。焼きたてスコーンと、キュウリのサンドイッチ。そして愛らしいケーキたち。アフタヌーンティも佳境に近づき、ティースタンドの一番上に手を伸ばしたところで、ローマンが言つた。

「ねえ、ディーン、あなた、あたしに借りがあること、覚えてるかしら？」

「借り？ 何だっけ？」

宝石のように輝くベリーのタルト。口に入れると、せつくりとしたタルト台とカスタードクリームが、見事な調和を奏でた。

「あなたが助けて欲しがつたときに、助けてあげたでしょ。ほら、ポールの同級生のショーンが来たときに」

「ああ」

生返事をし、ティー・ポットから紅茶をそそぐ。砂糖を入れないブ

ラックティーが本式だと聞くが、かまわず砂糖を放り込む。

「それで、返してもらおうと思つて」

「折り入って話って、そういうことか。こ、何だ？」

「あたしのボーイフレンドになつて欲しいの」

思わず紅茶を吹いた。するとローマンは「もうひと本並ごじゃな

いわ。お芝居よ」と付け加える。

おれはナフキンでテーブルを拭きながら、「ビーハイでまたそんな芝居をしなくちゃならないんだ?」と聞いた。

「あたしのママが今日、ここに遊びに来るの」

「話を逸らすなよ」

「逸らしてないわよ、よく聞いて。あたしのママね、とっても優しくて素敵な人よ。いつも息子のことを思いやつてる。それで、『今、彼氏はどんな人』って聞かれたことがあって。あたし、つい、あなたが彼氏だつて言つちやつたの」

「なんだつて!?

「落ち着いて。それつてまだあなたとポールとお付き合つする前のことだから。あの頃、あたし、あなたのことを狙つてたのよ。翌月あたりにはお付き合つすることになるだつと思つて、先を見越してママに紹介しちやつたのね。でも結局そつはならなかつた」

「ならなくてよかつたよ。てゆうか、なるわけないだろ。そもそも、こんなことポールが許すわけがない」

「ポールにはもう承諾済みよ」

「嘘つか」

「嘘じやないわ。お疑いなら、今すぐここに電話してじや覧なさい」と携帯を差し出す。

おれは無言で自分の携帯からポールにかけた。援軍であるはずの彼は「うん、話は聞いてるよ」と言つ。

「それで?」と、おれが聞くと、彼は「それでつて?」と返した。

「きみは承諾したのか?」

「承諾も何も、きみたちの問題だら? 貸し借りがどうのって話こぼくは関与してない」

「ポール、頼む。きみがノーと言えばローマンもあきらめる。馬鹿

な提案をするなと言つてやつてくれ

哀願すると、ポールは「困つたな……」とつぶやいた。何を困ることがあるのか、おれには少しもわからない。

「昨日、ローマンから頼まれたんだよ。『ちょっとでいいから、ディーンに協力してほしい』って。彼、本当に困つてゐみたいだつたし、ぼくは『ディーンがいいなら別に』って答えたんだ」「ディーンがいいなら別に。いいわけない。まったくもつていいわけない。はつきり言って冗談じやない。

「もしかして、きみもローマンに借りがあるとか？」

「そうじやないけど。でもいつも助けてもらつてゐるのは事実だね。『めん仕事中だから、もう切るよ

おれは果然として、通話の切れた携帯を見つめた。

「納得した？」と微笑むローマン。「そういうわけで、彼氏の了承も得たことだし、ここは気持ちよ~く、あたしに協力して頂戴な

「なんで……なんでおれなんだ……」

「だから、ママに……」

「他にいくらでもいるだろ？！　きみに頼まれて快くイエスという男どもなら、いくらでも！　そいつらに頼めばいいじやないか！」

吼えるように言つと、ローマンも負けじと金切り声で応戦する。

「それができたらそうしてくるわ！　でも一番最初にあなたの写真をママに送つて以来、ずっと送り続けるハメになつちゃつたんだもの！　クリスマスにお誕生日に、一人仲良くやつている場面をね！」

「いつきみと二人仲良くやつたってんだ！？」

「写真だけなら可能でしょ。クリスマス・パーティにお誕生日パーティ。いつもあなたとツーショットの写真、撮つてたの、気づかなかつた？」

「あれにはそんな策動があつたのか……。もう来年からは、きみと同じフレームには收まらないからな」

「ええ、それは結構よ。でも今日ばかりは協力して欲しいの。ほんと、お願ひよ。あたしが今まであなたに頼み事したことあつて？」

ローマンは両手を顔の前で組んだ。

確かに。彼は通常、頼み事らしい頼みはしない。ビサラカといふと、こっちが助けてもらつていることが多いかも。

「だいたいきみは特定の恋人を持たない主義じゃなかつたのか？」

「そうよ。でもママはそういうの嫌いなの。だからあたしは、いつもその時に付き合つてゐる人を紹介してたんだけ、ママはそろひひとりに絞るべきだつて言つわけ。で、あたしはママを安心させてあげたかった」

「だから嘘を？」

「なんとなくつき続けちやつた」きゅつと肩をすぼめるローマン。

「らしくないな。いつも正直なのが唯一の取り柄かと」

「取り柄はたくさんありますわよ。でもそうね。確かにわたしらしくない」

「今からでも遅くない。正直に言えよ」

「それができたら、あなたにこんなこと頼まないわよ」ローマンは

ふうと頬をふくらませ、それから息を吐き出してこいつ言った。

「だつて、あたしのママ……おつかないんだもの」「つむぎ、テープルの下でナプキンをいじる。

おつかないって？ ローマンでもビビるママってどんななんだ？

ロシアの女軍曹みたいな？ それとも ダメージ のグレン・クローズとか？

具体例をあげてもらおうとしたところで、玄関のチャイムがなつた。

「ママが来た！」ローマンは椅子から飛び上がるよう元気にして立ち上がり、母親を迎えるよとして、また戻り、「ね、頼むわよー」と、おれに念を押す。

「ほんの短い間だけでいいの！ 協力して！ 一生のお願いよ！」

小走りに玄関に向かうローマン。おれも後に続く。ドアが開くなり、母親は息子の名を大声で叫んだ。

「ローマンちゃん！」

「ママちゃん！」

二人はしつかりハグをし、互いの頬にキスを交わす。

「わたしの可愛いやん、元気だった？」

「もちろん！　ママちゃんも元気そう！」

「もちろん！」

顔を見合わせ口々と笑い転げる彼らは、どこか儚げ見ても親子だった。第一印象では『ローマン×2』とこな感じ。さて、この女性のどこが怖いんだって？

「ママちゃん、紹介するわね。あたしのカレピ！」

ローマンに腕を引っぱられ、こっちは調子を合わせやるを得ない。「どうも、よしやくお会いできました。ティーン・ケリーです。営業スマイルを浮かべて自己紹介すると、『ママちゃん』は「ベティ・ベイリーよ。ベティと呼んでくださいって結構」と笑いかけた。ひと目でサンローランとわかるパンツスーツ。濃いブロンドの髪は短く刈り込まれ、耳には重たげな金のイヤリングをぶら下げている。化粧は濃いが、ローマンのママだと思えば、これでもシンプルな方だと思えなくもない。

「まあ、『真よりずっとハンサムねえ』

“カレピ”の印象を述べるベティ。息子は「デジタル・カメラは『写りが悪いから』と言いながら、ベティのジャケットをスマートに脱がせた。

「ママちゃん、長旅で疲れたでしょ？　スリッパに履き替えて、くつろいで頂戴」

母親をカウチに座らせ、今、お茶を淹れるわね。日本の番茶でいい？」と訊く。ベティはすぐ立ち上がり、「長旅つてほじょうないわ」と言った。

「お茶はママに淹れさせて。あなたのキッチン大好き。とっても使いやすいし、広いのよね」

似たもの親子は仲良く台所に消え、あとはお喋りばかりが聞こえてくる。

なんだ、彼女は全然普通のママだ。ローマンがおどかすから、どれだけ恐ろしいかと覚悟していたが、いらぬ心配だつたらしい。やっぱり彼も人の子だ。母親が怖いとは、人間らしいところがあるじゃないか。

キッチンから楽しげな笑い声が響いた。娘っぽい息子と、それを愛する母親。恋人のフリをするぐらい、まあいいか。彼らの幸福に少しの花を添えてやれるのであれば、友達として満足だ。ローマンには後日、“別れた”とか何とか言つてもらえば、向後の憂いもないだろう。

……などと考えるおれは、例の如く甘かつた。こうやって今まで何度も、ローマンにしてやられていることか。どうしておれの前頭葉は、この重要な事実を記憶できていないんだろう。根が善人すぎるのか、それとも単なる阿呆なのか。前者であると信じたいが、どちらにせよ結果は同じ。ローマンに関わると口クなことがない。それが“彼によく似た母親”もセットで、しかもローマン自身をして「おつかない」と言わしめる人物。母親が怖いのは、人間らしいからではない。世の中には怖い母親というものが確実に存在し、たいがいの母親は息子にとつて怖いのだ。なんといっても、自分をこの世に送り出した存在だ。畏怖しない方がどうかしてゐる。

夜は三人一緒にレストランでディナー。夜景の見える素敵な席を、ローマンがばつちり押してくれた。おれたちの出会いや付き合うなれそめなどは、すべて彼が説明してくれたので、こつちは何も言うことがない。適当な相づちとナイスな笑顔。食事は旨いし、そう悪い夜でもないように思えた。

「それで？ あなたがた、一緒に暮らし始めてどれくらい経つの？」ベティの質問に、おれのナイフとフォークは動きを止める。一緒に暮らす？ なんだそれは？

「一年くらいかしら」ローマンがすかさず答えた。

「まあ、それはいい頃合いね。毎日楽しい？」

「もちろんよママちゃん。ディーンはとても優しいし、仕事は順調。これで楽しくないなんて言つたらバチがあたるわ」

「そうよねえ。あなたが幸せでママ本当に嬉しいわ」

ほのぼのとした空氣の中、おれは“一年くらい一緒に暮らしている”ところ、とんでもない嘘が気になつて仕方なかつた。おれたちの付き合いについて、ベティから深い質問をされたら、彼はどう切り替えすつもりなんだろう。こつちはローマンの出身校も知らないし、最近ハマつてる芸能人も、好きなレストランも、昨日どこで何をしていたかすら分からぬ。ここはあまり会話に花を咲かせないほうが無難だ。どつちにしろローマンがほとんど喋つてゐる。おれはデキヤンタから酒を注ぐ係に徹すればいい。

なんとか数時間だけやり過ごせばと思つていた矢先、衝撃的な事実が判明した。おれがベティに、ホテルはレイトチョックインかと聞いたときだ。

彼女は困惑した様子で、「ローマンちゃん、言つてなかつたの？」と、息子を見た。

「わたし、こつちに来るときは、いつも息子の家に泊めもらつてゐる。だからホテルはとつてないわ」

母親が息子の家に泊まる。それはいい。でもおれとローマン、“一緒に暮らしてゐ”つて設定じやなかつたか？

ベティはナフキンで口元を拭い、「でももしお邪魔だつてのなら、今からでもホテルを……」と言いかけたところで、ローマンが遮つた。

「駄目よママちゃん！ そんな水臭い！」母親の手に手を重ね、「あたしもディーンも気にしないわ。ウチに泊まつていつて。ね？」と哀願する。

「まあ、なんだか悪いみたい」

「悪いことなんてないわ。そうでしょう、ディーン？」

ローマンがおれを睨んだ。そこで言える台詞はただひとつ。

「もちろんですよ、何もお気になさらないでください」

身に付いた営業能力が恨めしい。食後のデザートは喉を通らなかつた。これからどんな事態が待ち受けているのかと考へたが、何も思い浮かばない。あつと想像を絶しているんだわ。

ベティが風呂に入つてゐる間、おれは不機嫌な口調で友人を問いただす。

「おい、何でこんなことになつてるんだ」
ローマンは炭酸水をグラスに注ぎながら、「なにが?」と涼しい顔。

「おれたち、一緒に住んでるだつて?」

「ええ、そうなの。ずっと前にメールでそつと書いたの」

「彼女がここに泊まるなんてことも聞いてない」

「言つてなかつたわね、『めんなさい』そらつと謝り、ウォーター ボトルを冷蔵庫に仕舞う。

「でも安心して。ほんの一週間よ」

「一週間! ? 一週間もいるのか! ? おれはてつくり数時間のこ

とだとばかり! ! !

「あら、誰がそんなこと言つた?」

「そうだ、勝手に命じたのはおれだ。まんまと隣にハメられたつてことか、くそつ。

ローマンはおれに水のグラスを渡し、「ねえ、あなた。あたしのママにもうちよつと愛想よくしてくれてもよくなくて?」と言つ。「してただろ。何が気に食わない」

「さつきのレストランであなたつたら、牛みたいにモリモリ餌を食べっぱなし」

「腹が減つてたんだ」

「ああいつ場面で、もうちょっとと氣の効いたこと言えないわけ？会話もできない愚鈍な男と付き合つてると思われるじゃないのさ」「愚鈍なんだ。嫌なら他をあたれよ」

「人の足元見てそんなこと言つ？！」

「足元見てるのはそつちだろ！ おれに眞しがあるとか、ポールに根回しするとか、いつたいどういつ？！」

「あなたたち？ 嘘嘆してるとの？」

声のした方を見ると、バスローブを身につけたベティが、怪訝な表情でおれたちを見ている。

「やだあ！ 嘘嘆なんて！」「ローマンはおれに身体を寄せ付けた。するわけないじゃない。ちよつと大きな声で話すとこれだもの。マママサちゃん、心配しそぎよ」

「セツ？ それならいいんだけど」

おれの横つ腹にこいつそり肘鉄をするローマン。おれは嫌々、彼の肩に手をかけた。

「あなた方もお風呂入つたら？！」

「ああ、そうだな。ローマン、先に入れよ。おれはポールに電話するから」

「ポールって？」とベティ。

「あたしたちのお友達よ。美容師の。話したことあつたでしょ？」

「ああ、あの彼ね。あなたとティーンを取り合つて、それで負けたつてこいつ」

そんな話になつてゐるのか。じーーもびつくりの捏造つぶりだ。おれは声にトゲが出ないよう、氣をつけながら、「汗を流してこいよ、ハーハー？」と促した。

するとベティは「あら、あなた方、いつも一緒にお風呂に入るんでしょう？」と驚愕の発言。「ママがいるからつて遠慮しなくていいのよ」

「遠慮だなんてそんなことあるわけないわ」ローマンはショックを受けているおれの両手を掴み、「お風呂じて行きまじつー」と、

無理やりバスルームに連れ込んだ。ドアを閉め、おれたちは互いに睨め付ける。

「おれは入らないぞ」

「ちょっとくらい協力してよ」

「絶対に嫌だ」

「別にお風呂ぐらいいいじゃない。とつて食おうつてんじやあるまいし」

「きみと一緒に入るぐらいなら、あざらしと入浴した方がマシだ」「ほんとに小心なんだから……日本の公衆浴場なんか、見知らぬ男同士、水着も着ないでお風呂に入るって知つてた?」

「きみは日本に行つたことないだろ。それにここは日本じゃない」「あたしが言いたかったのは、“裸なんて大したことじゃない”ってことよ。あんたはそもそも意識しそぎなの」

驅されるんじゃないティーン。一度はおれを狙つてたといつゲイの男と一緒に風呂に入るのを断わつたからとつて、意識しそぎつてことはないはずだ。

「とにかくあたしはお風呂をせてもうらうわ。今日は汗かいちゃつた」そう言つて、さつさと服を脱ぎ始める。おれは彼の方を見ないようにして、洗面カウンターの椅子に腰掛けた。

水音と鼻歌が混在するバスルーム。なんだつておれはここで、ローマンのシャワーに付き合わなきやいけないんだ。これだけでも拷問なのに、一緒にだなんてとんでもない。

「早くしてくれよ。おれも汗を流したい」

ノックの音がし、「ちょっと失礼。入つてもいいかしら?」とベティの声。おれは0・5秒で服を脱ぎ、バスタブに飛び込んだ。

「仲良くしてるとこ」、ごめんなさいね。目薬を洗面所に忘れちゃつて。そつちを見ないようにするから、お気になさりず

「あら、全然いいのよ。親子だもの」

おれは彼女と親子じゃない。よつて全然いいわけがない。

「目薬、目薬……ああ、あつたわ」化粧台から目薬らしきものを取

り、それからおれたちの方を見る。

「ねえ、ローマンちゃん。あなたちょっと太ったんじゃない？」

「いやん、ママちゃん。」これは太ったんじゃないの。夏だもの、少しビルドアップしたのよ

ローマンは立ち上がり、腰をひねってみせた。一糸まとわぬ生まれたままの姿を母親に誇示する息子。おれにはとてもできない。親子であっても裸はプライベートなものだ。

「薄着の時期はこの方がサマになるんだから」

「あら、そうなの。失礼しました」

親密な親子の会話を聞きながら、バスタブの中で必死に手足を縮こませていると、ベティの視線があれへと移動する。

「あら、ディーン。あなたタトゥーを入れてるのね？」
タトゥー？ そんなものは入れてないが……。

「ほらそこ」左脇の下から横腹にかけて

言われ、おれは左腕を上げ、自分の横つ腹を見た。彫つた覚えのないタトゥーを、つい探してしまつ。

「ママちゃん、何言つてるの？」ディーンはタトゥーなんかしてないわよ

「あら……そうね。嫌だ、私ったら、シャワーカーテンの影が写つたのを見間違えたんだわ。やあね、年かしら」

なんなんだ、この人は。“そつちを見ないようにする”なんて言つてたくせに、やけにじつくり見てるじゃないか。

「お邪魔さまでした」おじぎをして、ベティは出て行つた。

「まあ、どつきりしたわね。ママつたら、突然入つてくるんだもの」

「今日は諦めるとしても、明日からは別々だからな。一緒に風呂は今回だけだ」

「そうねえ、じゃあ何かうまい言い訳を考えておいて。喧嘩した以外の理由をね」

ローマンは泡の中から海綿を拾い上げ、ボトルからシャボンを絞り出した。

「おー、おれの身体にちょっかいに出すな

「なによ、ちよつとぶつかつただけじゃない。触らつと思つて触つたんじゃないわ。あなたこそさつき、あたしのお尻に手が触れたでしょ

「狭いんだから仕方ないだろー。」

「大きな声ださないで！」

「もう出ろよー！」

「そつちが出なさいよー！」

一日の疲れを癒すのがバスルームだが、今夜ばかりは異常なまでに疲労した。このまま寝たら悪夢を見てしまってそうだ。必要なのは愛と思いやり。おれはその一つを求め、ポールに電話をかけた。

「どう？ 偽装結婚はうまくいくてる？」

これが本物の恋人の第一声。どこか楽しげな響きが感じられるのは気のせいだらうか。

「結婚じゃない。偽装カップルだ」

「そうだった。ローマンのママとは？」

「会ったよ。思つた以上に強敵だな」

「あのローマンが恐れるくらいだもんね。きみから見てどう？ おつかない？」

おつかないわけじゃない。でもどこか何かが計り知れない。この“微妙に嫌な感じ”を手短に説明するのは難しい。おれが返答に困つていると、ポールは「今どこからかけてるの？」と聞いてきた。

「ウォークイン・クローゼットの中だ。外出したかったけど、ローマンに止められたからな」

「クローゼット？ それはひどいね」

「こんなのひどいうちに入らない。おれはローマンと一緒に風呂こまで入つたんだぜ。母親から怪しまれないようについて

てつくり同情されるものだと思っていたが、ポールが次にしたりアクションは、信じられないことに“爆笑”だつた。

「ほんとに？ きみがローマンと！？ ああ、うそだろ（笑） 信

じられない（笑）（笑）（笑）（笑）」

ポールは笑い上戸だ。だから、彼はおれの不幸を喜んでいるわけではなく、単に面白がってるだけなんだ。結果的に“ディーンの不幸を喜んでいる”という形にはなってはいるが、気にすることはない。

ポールはひとしきり笑った後「まさかと思つけど……」と前振りをし、「ベッドは一緒じゃないよね？」と聞いた。

そこで「一緒だと思う」とおれが答えた後、彼はふたたび呼吸困難に陥っていた。笑うことは身体にとてもいいそうだ。恋人が楽しそうにしてているのは嬉しいが、できれば別件で健康になつてほしかつた。

「それで？ ローマンはどうしてるの？」とポール。ビリやらおれの不幸にまつわる話は終わつたらしい。

「あいつは全身にマッサージクリームを塗るのに忙しいみたいだ。ついでに言えば、母親とはうまくやつてる」

「そつか、よかつた」

この流れのどこをどう切り取つて、“よかつた”という感想が出てのだろうと、おれが訝つていると、ポールは「ローマンはおかあさんのことが大好きなんだよね。うまくいってるのなら何よりだよ」と言った。そうか、“よかつた”のはローマンについてか。お肌はクリームで完璧。そして母親にはうまい嘘がつけた。そりやもう“よかつた”に違いない。

「じゃあ、これから頑張つて。ローマンによろしく」それだけ言つて、ポールは通話を遮断した。“ローマンによろしく”。なんてシンプルな別れの言葉。電話越しのキスもなしか。

正直これは信じられない展開だ。電話を切られたことじやない。“どうして今回に限つて、ポールはこんなに冷たいんだろう”つてこと。おれがローマンと一緒にでも不安じやないのか？ 男と密接に二人きりというのは、いつものポールだつたら確実に怒り狂うシチュエーションだ。もっともおれとローマンでは、間違いなど起きた

わけもないから、安心といえば安心なのだが……。

『じゃあ、これから頑張つて』とポールは言った。何をどう頑張れといつのか。むしろ何も頑張りたくない。ベッドはスーパーキングサイズ。シーツはシルクで、不気味なほどに光沢している。

「あたしのベッドは大きいから、あんたと二人でもゆつたり眠れるわよ」

そうローマンは言ったが、どんなにベッドが広くとも、彼と一緒にでは“ゆつたり眠る”ということは難しそうに思えた。（ベッドがネブラス加州ぐらいデカきや別）

「さ、ダーリン じつちへいらして」

ポンポンとベッドを叩くローマンに、おれはウンザリし、「そういう小芝居はもういい」と首を振った。「今夜は疲れたよ。馬鹿な演技はもう終わりだ」

「そうしたいところだけど、でもママが聞き耳たてるかもしれないじゃない？」

「聞き…！ きみの母親は変態か！？」

「ほらもう、また大きな声！ ちよつとはあたしに氣を遣つたらどうなの？」

「きみは意識しすぎだ。母親が息子の部屋に聞き耳なんて立ててるわけないだろ」

「そう思つ？」

「思つね」

「甘じわよ」ローマンはきつと目を細めた。「せつきのママ、見たでしょ。お風呂あなたの裸を見てた」

「それが何だ？ 刺青が入つてると思つたんだが」

「あれはわざとよ。ママはあなたの裸が見たかったのね。どんな体型だか確認したかったんだわ」

おれは「の句が継げなかつた。息子の恋人の裸が見たかつただつて？」のために、わざわざバスルームまで入つてきただつて？ そして今も聞き耳を立てているかもしだい？ それが事実なら異常な行為だ。いつたいどんな種類の病気なんだ。

「なあ、ローマン。きみはこの状況を面白がつてゐんじやないのか？」

「ええ、もちろん……と聞こたいといひだけど、今回ばかりは違つわ。本当に？」

彼は深々と溜め息をついた。ブルーな吐息は本物だらう。困り果ててゐるのもたぶん本当。だからといって、「あたしたちが仲良くしてゐる声を聞かせれば、ママも安心するのよ」という提案に、進んで乗りたいとは思わない。

棒きれのよう立ちはぐくすおれに構わず、ローマンは「ああ、ダメーーン。イイコトしましょ」と、壁に向かつて声を出した。おれに言つてゐんじやない。どこかで聞き耳を立ててゐるかもしだいママに向かつて、彼はひとつお居を始めた。

「ああん、ティーンつたら、慌てないで。ベッドから落ちちゃうじやない」

甘つたるい鼻声。こんな下らないことに付き合ひつてのか。冗談じゃない。

「勝手にやつてる。おれは参加しないからな」言つて、彼に背中を向けてベッドの隅に横たわる。

「ねえ、明かりを消してもいい？ 嫌？ あたしのことをよく見たいのね？」

見たいわけあるか。明かりを消して尚、畠田に眼帯をしたこところだ。

「ああ、もう……そんなに激しくしけやいやん」
激しくつて何だ。“激しく殴る”とか、やつこいとか。

「いやつ、そんなとこね……駄目よ、ああん」

そんなとこねって、どんなとこねだよ？ いや、知りたくないね。

「 もう、あなたったら、ママの前ではクールぶつてたくせに……ほんとにムツツリなんだからん 」

「 ……誰がムツツリだ！ いいかげんにしろー 」

「 もちつ！ いやん！ 」

「 “ いやん ” じゃない！ これ以上おかしな声を出すな！ 」

我慢の限界。それは五分と保たなかつた。掴み掛けり、ローマンの身体をレスリングのよつに押さえ込む。

「 ちよつ……ちよつと、ほんとにいやんつてばー、髪の毛がめちゃくちゃになるつー 」

「 知るか、このあばずれー、ケツをひつぱたいてやるー 」

「 ベッドから落ちるうー 」

おれたちのやり取りに聞き耳を立てていたとしたら、これはひどいプレイに聞こえたことだらう。それはある意味、正しいと言える。だいたいこの企画自体が“ ひどいプレイ ” じゃないか。おれたちはベティに嘘をつき、芝居ときたら最悪だ。よいところなど何ひとつ見つけられない。もつともひどこのせ、“ 親が息子の寝室に聞き耳を立ててこるかも ” ってこと。つまりここのここののは、最悪な連中だ。

ローマンは母親を安心させたいと思って、母親はローマンを心配する。おれはローマンの頼みをきいてやつた。お互いが相手を想い合つているはずなのに、どうして皆が皆、最低の人間になつてしまつただらう。

清々しくあるべき朝は、切り裂くよつな叫び声によつて打ち破られた。恐怖におののく悲鳴を聞きつた、耳が覚める。ちなみに自分 の悲鳴だ。

ローマンは耳の穴に指を突つ込み、「 痛つ！ 耳痛つー 」 と怒鳴つた。「 なんだつて朝つぱらからでつかい声だすのよー、鼓膜がど

うにかなつちやうじやない！」

「ああ……」めん。きみがベッドにいたから、思わず

「あたしのベッドだもの。あたしがいるのは当たり前でしょ」

なんとこう朝。なんとこう日覚め。ローマンがいるのが当たり前で、あまつさえ彼は全裸ときてる。『なぜ裸なのか』なんて聞きたくないし、知りたくない。ただ単に、彼は裸なんだ。それ以上の情報を手に入れたところで、どうなるものでもない。

キッチンではベティが朝食の支度をしていた。スープ鍋をかき回しながら、「昨日はすいぶん激しかったみたいね？」と、朝の挨拶。「若いんだから無理もないけど、隣の部屋まで丸聞こえ。わたしはオープൺなママだからいいけど、他のお姉さんが来たりしたときは気をつけた方がいいわよ。ねえ、この家つたら、豆乳しかないの？シリアルにミルクがないなんて、一体どうなつてるのかしら？」ええ、本当。一体どうなつてることやら。この家は地獄だ。シリアルにミルクがないんだ。もう絶望するしかない。

窓からジャンプしようかと思つたが、すんでのところで妙案を思いついた。おれは“彼氏”に「今夜は戻らないよ」と言ってみる。それはベティの見ている前で。

ローマンはおれのネクタイを結びながら、「どうして？」と訊ねた。

「今日から出張なんだ」

「あら、そんなこと聞いてないんだけど」

「言ってなかつたつけ？ 一週間は戻れない」

「出張の荷物は？」

「会社に置いてあるから大丈夫。必要なものがあつたら出先で買つよ

ネクタイで首を絞められる前に、おれはサッと身をひるがえし、ベティに別れの挨拶をして、地獄の家から逃げ出した。

もちろん出張なんてあるわけない。つまりこれは嘘だ。しかし罪悪感は感じない。嘘に嘘を重ねたところで、今さらどうつてことは

ないはずだ。

その夜は自分のベッドでゆっくりと眠った。おれが戻つたことを知らないポールは、友達の家に泊まりに行って留守だったが、自宅に戻ることが出来、とりあえずはとても幸せだった。ローマンから着信が何度かあつたが、すべて無視する。可哀想だが仕方ない。あの家にいると精神が蝕まれるし、そのせいで友人の首に手をかけることになつたりしたら、『可哀想』どころじゃ済まれない。互いの平和のためにも、これが一番。だいたいおれとローマンが一緒にベッドで寝るなんて、悪い冗談にもほどがある。

タイミングというのは本当に不思議なものだ。それはほんのわずかの時間、午後三時過ぎにオフィスを出て、五分ほど「コーヒーショップに立ち寄つた際に起きた奇跡。

「あら、ディーン」

呼び止められ、振り向くと、そこにはベティが立つていた。

「あなた、出張じゃなかつたの？ ここで何してるの？」

非常に難しい質問を浴びせかけられ、おれは手に持つたカプチーノを彼女に浴びせかけそうになつた。それは聖なる言葉を唱えつつ。ベティが「出張つてのは、一泊だつたつてことかしら？」と疑わしげに言つので、おれは取つてつけ、「本当は一週間の予定だつたんですが」と言い訳をする。

「本社でアクシデントがあつて、急遽、呼び戻されたんです。ベティ、あなたはどうしてここに？」

「あなたの務めてる会社、どんなところか見たかったのよ。とつても立派なビルなのね」

ここはうちの会社の持ちビルじゃなくて、テナントだ。じゃなくて。そんなことはどうでもいい。この人はなんだつてこうストーカーみたいなことを平氣であるんだ？！

「じゃあ、今日は家に帰つてくるのね？ 息子に報告す？」

「いえ、まだ」

「わたしから言つておいてあげるわ。じゃあ、後で」

「……えーっと、今なにが起きたんだ？ おれは目をぱちぱちさせ、考
える。ああ、そつか、作戦が失敗したつてことだ。はは、笑える。
たつた一杯カプチーノを買いに出ただけで、まんまと捕まつてしま
つた。このマンハッタンに、これほどタイミングの悪い奴が他にい
るだろうか。少なくともこの界隈ではおれがナンバーワンとみた。
こうなつたら、わざと車にはねられて入院でもしてやるひうか。UF
Oに遙か宇宙の彼方へ連れ去られるのもいい。もちろんどちらも
得策ではない。

その夜はローマンに花を買つて帰つた。

彼は花びらを指先でいじり、「今日つて何の日だったかしら」と
目を丸くする。

「別に何の日でもないさ」ネクタイを外しながらおれは答えた。「
意味なく恋人に花を買つちゃ悪いか？」

「ぜんぜん。とても素敵よ。お花は大好きだから」

白いカラーの花束を抱き、ローマンは優美に微笑んだ。

「あなた、カラーの語源を？」

「いや、知らない」

「ギリシャ語で“美しさ”を意味する言葉、“カロス”からきてる
の。花言葉は“素晴らしい美”」

おれたちの会話を聞いていたベティ、「ローマンちゃんにぴつた
りじやないの」と言つて、息子に優しく頬を寄せた。

おれは花言葉には詳しくない。ギリシャ語はもつとだ。花を買つた
のは、少しあ取り繕つた方がいいかと思つてのこと。ベティはお
そらくおれのことを疑つっていて、出張なんて嘘だと思つてゐるはずだ。

（まあ、その通りだが）。

彼女の疑いを、花という愛情の化身で晴らすことができるのであれば安いもの。ローマンへのプレゼントといつ名田だが、実際はベティにアピールするためだ。

「こんな素敵なブーケ、ママは一度だって貰つたことないわ。『ディーンは本当にセンスがいいのね』

ほらな、効果てきめん。花が嫌いな女など聞いたこともない。ブルームで大枚はたいた甲斐があった。おかげで夜は穏やかに過ぎ……と言いたいところだが、そうスムーズに事は運ばない。

食後にコーヒーをたしなみながら、ベティがする話題はふるつている。

「ディーンは息子のどんなところが好きなのかしら？」

それは結婚の報告をしにきた若造に、義父が訊く質問だ。ローマンは顎に手を当て、興味深そうに oreを見つめている。

「それは……」と口にし、しばし考える。ローマンの好きなところはローマンの好きなところ……好きなところなんてあつたか？

懸命に記憶をたぐり、おれは友人の美点を探し出す。

「彼はいつも明るいし……それに何て言つたか……性格が面白いところかな」

陳情終了。ここ数日の状況で、ローマンの好みといふのを述べよというのは、よほどのペテン師でない限り難しい。スピーチのあまりの短さに、二人はあっけにとられているようだ。

「やあね～、ディーンつたらー！」突然ローマンが頓狂な声を上げた。

「いつも言つてくれてるでしょ？ ほら、『きみは美しい』とか、『世界一魅力的だ』とか。ママの前だからつて照れてるのね。ツンデレさん」

おれの頬を人差し指でつつくローマン。その手を取り、「照れてるわけじゃない」と言い返す。「何と言つたか、きみの素晴らしいさは筆舌に尽くし難いからな。一晩かけたつて無理だ」

「そうね、あなたはボギヤブラリーが豊富じゃないものね

トゲのある言葉に言ひ返さうとしたが、話の流れをベティが変えた。

「じゃあ、逆にローマンちゃん。あなたはティーンのどんなところが好きなの？」

ローマンはこいつと、「ティーンの好きなところはね。ナルシストなところ」と話し出す。

「彼、自己愛がとても強いの。子供っぽくてとってもかわいいわ。繊細なところも好きよ、びっくりするような些細なことでクヨクヨしてる。かと思えば剛胆なところもあって、オークションで得体の知れない相手から、高価な時計を買つたりできる。それで騙されて泣いたりしてるみたいだけど、それは彼が善人だからだわ。それとここが肝心なんだけど、あたしたち、セックスの相性も抜群。これがよくなきや、とっくに別れてたわよね？」

「ああ、そうだな。もちろんとっくに別れてたぞ」

田の前の男の首を思い切り絞めてやりたいという欲求を抑えつつ、チョコレートを口に放り込む。「ここにあと数日もいたら、ストレスと糖分の取り過ぎとで肥満になりそうだ。いつそ醜く肥え太れば、ローマンもおれを偽装彼氏にするという馬鹿なアイディアは忘れてくれるだろう。もつともそうなつたら、おれはポールにも振らってしまいそ่งだが。

「ねえ、ちょっと。そのぐらいにしておいたら、チョコレート、食べ過ぎよ」

ローマンの忠告を無視し、「チョコが好きなんだ」と、もうひとつ口に入れる。

「それは知ってる。でもほじほどにしないと。顔に吹き出物がでるわ」

有無を言わさぬ調子で、チョコレートボックスのフタを閉める。ポールだったら、こいつとき、「じゃあ、あとひとつだけね」とか何とか言って、おれを甘やかしてくれるのだが。

「ティーンは思つたより食べる人なのねえ」と、ベティが感心した

ように言った。

「バレエダンサーはもつと節制しているものかと思つたけどなに？ また何か……聞き慣れない妙な単語が耳に飛び込んできたようだが……。

どう答えたらいか分からぬでいるおれに、ベティは「舞台ではどんな役をやつていたの？」と、無邪氣に問いかける。小学校の頃には『アーサー王物語』で石から剣を引っこ抜く大役を果たしたが、彼女の質問はもつと別なところにポイントがあるらしい。返答に窮しているとローマンが「いろいろよ」と答えた。

「いろいろじゃわからないわ」

「だつて本当にいろいろなんだもの」

ローマンは携帯を取り出し、いじり始めた。この時点でおれにはもう状況がさっぱり読めていない。

「ちょっと待つて……ほらこれよ」

携帯から画像をピックアップし、おれとベティに差し出すローマン。そこには見覚えのない舞台と見覚えのない男が写っていた。

「まあ、素敵！ これは何の役かしら？」

「もちろん王子様に決まってるじゃない」

「なんだか別人みたいねえ」

「バレエ用のメイクすると顔つけてすぐ変わるのよ」

よし、わかつた。ここまで流れから推測すると、おれはどちらバレエつてものをやつしているらしい。しかも舞台に立つほど実力を有している。すごいな、おれは。そんなのちつとも知らなかつた。

「最近は練習の方は？」 そうベティが訊くので、「勒帶を切つてからは、舞台から離れていて」と答えておいた。

あまりいい話題じゃなかつたと察したベティが“『不浄』に逃げた隙に、おれはローマンを怒鳴りつけた。

「バレエって何だよ！？」

当然の疑問に、彼はしぐとした顔で、「つっかりしてたわ」と

言つ。『Hドワード』と付き合つた頃、ママに“彼氏が舞台に立つてゐ”つて話をしきやつたの。そのこと、覚えていたのね
「だつたらそのHドワードとかいう奴に、彼氏のフリをしてひりや
よかつたじやないか

「もうとつべのとつに別れちやつたもん。それに言つたでしょ。ママには“デイーンの写真”を送つてたつて。だいたい、あたしの周りに長いことこのイケメンつて、ぶつちやけあなたぐらいなのよね
「周囲にいたイケメンを手当たり次第、食つちや捨てしてきた報いだな。ところでさつきの写真は誰なんだ？ Hドワードか？」

「知らない人よ。『バレエダンサー 黒髪 長身』でググつたら出てたきたの。ええと……『アルテム・シュピレフスキイ』だつて。
ハンサムね」

心底あきれる。よくもまあ、こんなその場かぎりの嘘がつけるもんだ。もし彼女がシュピレフスキイとやらの写真を、後日見つけたらどうするつもりなんだ？ そのときもまた適当な嘘で切り抜けるのか。ひどい息子もあつたもんだ。

ベティが戻ると、舞台の話はテーブルからかき消えていたが、おれはあえて、それを蒸し返すことに決めた。

「そういうば、ローマン。おれの事より、きみの舞台は？」

「あたしの舞台？」

「ローラスのコンクールに出た事さ。彼女に話してないのか
するとベティは「まあ、そつなの？ 初耳よー」と、目を見開いた。

「彼はなかなかの歌い手ですよ。そうだ、いい機会だから歌つて聴かせてやるといい」

ローマンは頬をぴくぴくさせ、言葉を失つてゐる。さて、どうする？

「ぜひ聴かせて」

ベティがせがむと、彼は咳払いをひとつし、“ローラスのコンクールに出たときに披露したとされる曲”を歌いはじめる。演目はシ

コーベルトの『ます』。残念ながら歌詞は英語だ。ローマンの歌は聞くに耐えないという程ではないが、とてもコンクールレベルではなく、はつきり言って、これっぽっちも上手くない。ああ、なんて素晴らしいんだ。笑いを堪えすぎて窒息死しそうだ。

歌い終え、「ウォーミングアップなしだったから……」と恥じ入るローマン。ベティは瞳を輝かせ、「とっても上手よ。素敵だったわ」と、息子を褒めそやした。

「一日の終わりにあなたの歌を聴けるなんて、わたしは幸せ者ね。本当にここに来て良かったわ」

幸せを噛み締める母親がシャワーを浴びに行くや否や、リビングは戦場と化した。主な武器は言葉だ。

「ローラスのコンクールって何なのよー」

「きみこそ人を勝手にバレエダンサーにしたくせにー」

「あんたにアラベスクさせなかつただけマシでしょー」

「そんなことをせてみるーきみの下らない嘘がバレるだけだ！」

「あたしが本気を出せば、あんたなんか今頃、四つん這いになつてアンアン声上げてんだからねー！」

「誰がそんなことー思ひ上がるのもいいかげんにしるー！」

しばらく、ギャアギャアやつた後、ベティが風呂から上ると、おれたちはまた穏やかなカッフルのフリをする。まつたくなんて馬鹿らしいんだ。これじゃチョコレートが何箱あっても足りやしない。そもそもなぜこんなことをやつてこいるのか、今となつては少しも思ひ出すことができないんだ。

今日もまた、おれはローマンのベッドで朝を迎えた。目を開けると、彼の顔がやけに近くで確認できる。たしか寝る直前までは、お互いベッドの隅にいたはずだが……。

そこで股間に違和感を感じる。その不気味な感覚。おれは彼に訊い

た。

「なにを……している……？」

「なにって、あなたのおちんちんをいじつてるの。気持ちいい？」

「や、やめろ……」

「あら？ わつきまで元気いっぽいだったのに、田が覚めた途端、どうじたのかしら？」

おれのモノをきゅっと握り、ローマンは悪魔のよひ、じこつと田を覗き込んできた。

「いいこと、今日ひなはママの前で“素敵な彼氏”を演じて頂戴。でないと本当に本気を出すわよ。あなたの可愛いお尻にローマン・キヤンドルをブチ込まれたくなかったら、少しはあたしに協力する姿勢を見せて」（ローマン・キヤンドル＝ 簡型花火のことだが、彼が言っているのは、もちろん違う意味）

数秒後におれは部屋を飛び出し、バスルームからひのひのの電話をかけた。

「助けてくれ！」震える手で携帯を持ち直し、「もつ駄目だ！」のままじゅローマンにレイプされる！」と訴える。

「落ち着いて」とポールは言った。寝起きらしく、声がまだぼんやりしている。「レイプだなんて、彼がそんなことするわけないだろ？」

「きみはあの男を置いがぶつてる！ 本性を知らないんだ！」

「ぼくはきみよりローマンとの付き合いが長いよ。彼のことなら知り尽くしてる。そんなに心配しないで、もうちゅうと氣楽に構えたうじう？」

寝起きに股ぐらを掴まれて氣楽に構えられるって、それはどんな剛の者なんだ。少なくともおれはもつと纖細にできている。「」の際だから、彼に恩を売る機会だと思えばいいんじゃない？ ローマンはあれで義理堅いから、きみに感謝こそすれ、悪いようはしないと思うな

悪魔に卖るのは魂と相場が決まってる。“悪いようにはしない”

彼があまり真剣に取り合ってくれないので、こつちのテンションも下がった。ひとりで喚いてるのはみつともない。そろそろベティも起きてくる。会社に行く支度をしなければ。

傷つき、いちひしがれつつも、何とか日常に戻ろうとするおれに、ローマンはこうと微笑みかける。

「じゃあね、ターリン。今度は君が握る。君があらねえよ！」

“良い日”か。良い日なんでもう何日も見ていいない気がする。ベティがここに来たのはいつのことだっけ？ とても長い時が経つた気がするが、まだ四田日だ。たつた四日でこんなにも疲労した。計つていなが、おそらく体重も減ったはず。わずか四日であなたもスリムに。方法は至つて簡単、ベティ＆ローマンと暮らすだけ。まともな神経の持ち主であれば、最低でも五キロ減は保証できる。

アップルパイとドーナツ、砂糖とクリームたっぷりのコーヒー。

今日のランチはおそらく健康に悪いが、心には優しい。今やおれの味方は糖分と炭水化物だけのようだ。会社には恐ろしい上司がいるし、帰宅するべき場所にはモンスターが一人。世界一おれを大切にしてくれるはずの恋人は、どういうわけだかローマンの肩を持っている。

改めて思い直しても、ポールの態度はちょっとおかしかないか？いくら寝起きで面倒だからって、おれの心の叫びを無視するするかのような対応。『頑張つて』だの、『気楽に』だの、二つちがどただけ困っているか、わからない彼でもないだろ？に。ペットだけよその家に預けられたら、ストレスで毛を引っこ抜いたりするんだ。おれはそこまでおかしくなってはいないが、そのうちやりださないとも言い切れない。

従兄弟のビリー・ジョーは子供の頃、ペヴという名のイタチを飼っていた。ペヴは、“お泊まり”と称し、よその家にじょっちゅう預けられていたのだが、可哀想に、そのたびに毛を減らしていたのだ。そして、たび重なる外泊にペヴが慣れた頃、ビリー・ジョーの母親である、エドナ叔母さんが言つた言葉が忘れられない。

「ペヴはよそのお家にあげることにしたの。きっと可愛がつてもらえるわ」

ペヴが里子に出されたのは、共働き夫婦である一人が世話をしきれなくなつたからだ。そうだが、子供のおれには理由なんてどうでもよかつた。彼女の計画的行為にはショックを受けたし、もしそんな風に自分が他の家に捨てられたらどうしよう想像しては、そつと枕を濡らしもした。

「ティーンはローマンあげることにしたんだ。きっと可愛がつてもらえるよ」

これが巧妙に仕組まれた別れの演出だとしたら？ そんな可能性は百万にひとつもないと信じたい。だいたいおれはペットじゃないんだ。そう簡単に譲渡されるものではない。

この考えがナンセンスであることはわかつてゐるが、やけに不安だ。もしかしたらローマンと生活することで、精神に何らかの障害が出てきているのかもしれない。

哀れなペヴは、新天地で幸せになつただろうか？ そうであつてほしいと心から願う。ちなみに従兄弟のビリー・ジョーは、別離の直後に亀を買つもらつていた。この裏切り者め。

「一ヒーを立て続けに飲んだり、砂糖と油ばかりを摂取しているせいか。はたまた単にストレスか。きっとその両方だ。胸焼けがひどく、気分が悪い。発汗と悪寒が認められたところで仕事を切り上げ、帰宅することに決めたが、体調不良の元凶が待つ家になど帰り

たくはない。この状態で魔物と戦うのは不利の極みだ。おれは、おれを癒してくれる天使に会う必要がある。今すぐ」。

会社を早退し、恋人の勤務する美容室へと直行。電話で店の前に呼び出したところ、「こんな時間に、どうしたの?」と、天使は言った。

「きみの顔が見たくて」と、おれは答える。数日ぶりの再会だ。大喜びですがりついてくるかと思われた恋人は、「前もって電話をくればよかつたのに」と、眉間にシワを寄せて頭を左右に振った。「危ないところだった、はち合せなくてよかつたよ。今日の午後、ローマンのママがここに来たんだ」

「なんだって? それ本当か? いつたい何しに?」

「髪をセットしに来たのさ。ぼくを指名してきて、根掘り葉掘り聞かれて困ったよ。きみたちの仲を明らかに疑ってる」

「だらうな。実際つきあってないんだから。彼女、どんなことを?」

「いろいろ喋つてたけど……」思い出そうとするよつに考え込み、

「内容を要約すると『ディーンの態度はおかしい』って話」と、最初から結論をまとめた。

「ローマンに冷たい態度をしたかと思えば、いきなり花束なんか買って帰つてくる。出張の話も嘘じやないかとか、あげくの果てに『ディーンは何度かあなたに電話してみたみたいだけど、どんなことを話しているの?』だつて

「ちょっと待てよ。なんで彼女、おれがきみに電話してることを知つてるんだ?」

「そんなことほぐに聞かれても分からないよ」と肩をすくめる。ベティはおれの携帯の発信履歴を見たのかもしない。彼女だったりやつしかねないことだ。

おれが黙りこぐると、ポールは「思った以上に大変みたいだね」と、指の背でおれの頬に触れた。「なんだかやつれたみたい。嘘がバレないようにするにはひと苦労だ」

「ああ、まったく。こんな状態は苦痛極まりない。毎晩、きみが恋

しゃべて狂こううだ

「まくもだよ。早く一緒にベッドで眠りたい」

「ほんとか？」

「なにが？」

「本当にそう思つてる？」

「当たり前じゃない。何で疑つたりなんか？」

「いや……」

「いつだつて愛してりよ。心配しないで。ヒーリー、ペリーリー、まくはまだ仕事の途中なんだ」

「ああ」

「「めんね。今日はこれで」

「待て」

去りうとするポールの腕を掴んで引き寄せ、抵抗する間も戻えず、抱きすくめてキスをした。舌を絡ませると、彼はわずかに拒むような所作をしたが、すぐに同意の姿勢になる。長過ぎる口づけが終わると、ポールはぽやんとした顔つきになつていて。甘くため息をつき、「ティーン……」と抗議する。

「ああ、そうだな。」ヒーリーは往来で、きみの働いてる店の前だ。だからキスだけで我慢した。そうでなかつたら今ここできみの服を破りとつて、キス以上のことをしてやりたいね

「すこしく素敵。まくも今すぐきみの前にひざまずいて、ジッパーをおひして……」

「おつと、その先は言つな。」ヒーリーは往来で、きみの働いてる店の前だ

「ねえ、早いとこ仕事を片付けるから、先につけり帰つててよ」

「おれたちの家に? ローマンには何て?」

「今夜は遅くなるつて言つておけばいい。深夜を過ぎる前に帰るからつて」

その手があつたか。ポールは本当に頭がいい。そこから先はフイルムの早回しのようにスピード。具合が悪いのも忘れてダッシュ

し、懐かしの我が家に駆け戻る。急いで しかし念入りに シャワーを浴び、ベッドを整え、香を焚き、準備万端でポールの帰宅を待つた。時計を見ると、8時を過ぎたところ。セックスをしたら、とんぼがえりでローマンの元に戻る算段だ。しかし、これじゃまるで浮気男だな。

ベッドに腰かけ、遅くなる皿をローマンに電話で伝えると、彼は「ちょっとやめてよ！」と大声を出した。

「今夜はレストランを予約してあるのよ！？ あなたがいないなんて、ママに何て言つたらいいの…？」

「そんなの知るかよ。おれはこれからポールとセックスするんだ。これだけは誰にも邪魔させないからな」

「そういうことはレストランを予約してない日にして。それに、あたし言つたでしょ。『今日』そはママの前で“素敵な彼氏”を演じて頂戴』って……」

そういえばそうだった。その後に続く台詞は、たしか“ローマン・キャンドル”がどうとか……。突如、背筋がゾッとして、気づくとおれは「わかった、わかったよ！」と叫んでいた。何がわかったのかはわからないが、それに続く言葉はこうだ。

「レストランに行けばいいんだろ」

するとローマンは、さも当然のよ「そうよ」と言つ。『トスカニーに8時半。遅刻しないでよ。じゃ、後で』

「ちょっと待てよ」電話を切ろうとするローマンを止め、おれは言った。

「遅刻はしない。そのかわり頼みがある

トスカニーはいいイタリア料理店だ。以前からそう思つていたが、今夜さらなる確信を得た。予約時間の三十分前に「もうひとり人数を増やしたい」という客の要望は、店にとつては迷惑極まりないこ

と。しかしトスカニーは突然の増員に快く対応してくれた。これこそ接客の手本だ。かくしておれとローマンとベティ、そしてポールは“四人で”親睦を深めるに至る。

ポールを加えたのは、言つまでもなくおれの提案だ。ベティ＆ローマンは最強のタッグだが、こつちも一人となれば心強い。きっとポールはおれの味方になつてくれるはず……という想定は、前菜の段階から微妙になつてきた。

「ぼくから見て、ローマンとベティーンは理想的な恋人同士だと思うな」

質問魔のベティが、息子とその恋人について、友人としてどう見えるかを、ポールに訊いたときの答えがこれだ。

「仕草の端々から、お互いを思い合つてることがわかるつていうか……。彼らは心から愛し合つてるカップルだって、仲間うちでも評判なんですよ」

ワイルド・マッシュルームのソーテーにフォークを刺し、ポールは涼しい顔でそう言った。それを咀嚼し終え、友人に顔を向ける。

「ねえ、ローマン、今日きみのおかあさんにお会いして、きみがどうしてこんなに楽しくて素敵なのか、わかつた気がするよ」

これにはベティも大喜び。頬を紅潮させ、「うちの息子はよいお友達を持つたわね」と満足げな笑みを見せる。彼女、きっとおれのことは“よい恋人”とは思つていないだろう。とにかく口が重いし、今だつて黙つたまま、皿の上のものを平らげることに情熱を燃やしている。

ポールはほがらかによく笑い、ローマンもベティも会話を楽しんでいる。そしてここでも、おれはまた居たたまれない気持ちを抱えていた。

「本当にきみたちはお似合いだよね。ふたりが一緒にいると、まるでファッション雑誌の広告みたい」

ポールは微笑み、おれの目を見てそう言った。これは褒め言葉なんだろうか。一般的にはそうだ。おれとローマンが本当の恋人同士

だつたら、『お似合い』と言われて嬉しく思ったことだろ？

ポールは何度となくおれたちを褒めちぎり、それを聞かされるたび、おれの胸は痛んだ。料理は最高なのに、テーブルの上には嘘がのさばつている。これがベティのためだつて？ 本当にそうなのか、おれにはもうよくわからない。ただ、ポールが下らない芝居をしているのを見るのは苦痛だし、それに会わせなくてはならないのもやりきれない。

ピアノの生演奏が切なく響く。ボッケリーのメニューは溌剌として楽しい曲だが、おれの心には悲痛の調べだ。今だつたらジャッカスを見ても泣けるだろ？

ウェイターを呼び止め、早めにメインを持つてくれるよう頼んだ。悲しいかな、食つことぐらいしか楽しみがない。どうせまた後でローマンから、『牛みたいにモリモリ餌を食べっぱなし』な件について何か言われるんだろうが、構うもんか。

半ばヤケ気味になつて、ステーキに食らいついてると、ポールがこちらに視線を向け、渋い顔をする。なんだ？ 食事のマナーで何か失礼なことでもしたか？ それともやつぱりきみも、『牛みたいにモリモリ餌を食べっぱなし』ってのは気になるのか？

巨大なティラミスを胃に叩き込み、ようやくディナーは終了。店を出て、右と左におれたちは別れた。いつもだつたらポールと同じ方角に向かうのだが、今夜は彼を見送るという寂しい役割。終わりがこんなどんなて悲しすぎる。小さくなるポールの背中。そこに駆け寄り、思い切り抱きしめ、おやすみのキスをしたい。でもそれはできないんだ。ああ、なんという悲劇。

「ちょっと、ぼさつとしてないでタクシーを捕まえてよ。」

ローマンから命じられ、おれはタクシーを拾つべく、大通りへ出了た。夜のマンハッタンは物騒だというが、誰もおれを誘拐する気配はない。しかもこんなときに限つて、タクシーはすぐに見つかるときた。運転手に「冥王星まで」と告げたい衝動にかられたが、それは不可能。おれの後から、すぐに一人が乗り込んできたからだ。

車が走り出し、ベティが「ディーンはタクシーを見つかるのがつまいのね」と褒めてくれた。嬉しくない。

寝る直前、おれはクローゼットにこもり、ポールに電話をかけた。今やこの場所が定位位置となりつつある。狭苦しさは感じるものの、椅子を持ち込んだら割と快適になつた。もう少し広かつたらこので眠れたのに、残念だ。

しばらく呼び出し音が聞こえたのち、ポールの携帯は留守番電話へと切り替わつた。そこで家の電話にかけなおす。しかし誰も出ない。メールを送り、数分待つも返信はない。店を出てから一時間以上が経過しているので、まだ帰宅していないということはないだろう。風呂か？ それとももう寝た？ まさか電話に出たくないとかじゃないだろうな。そういうえば、さきほど食事の席で、彼は妙な表情をしておれのことを見ていたつけ。あれには何か深い意味があったのだろうか。

突然、不安が広がり、リダイヤルのボタンを押す。出ない。もう一度。頼む、出てくれ。いつたいどうしたんだ。警察を呼ぶべきだろうか。

頭の中が恐ろしいイメージでいっぱいになつたとこりで、ようやく電話が繋がつた。

「ああ、ポール。よかつた、いたんだな」「ごめん、シャワー浴びてたんだ。どうしたの？」
「別に用事じゃない。寝る前にきみの声を聞いたくて」「そうなんだ。でもさつき別れたばかりなのに」そう言って、ポールはくすりと笑う。「離れた途端に、ずいぶん愛情深くなつたみたい。これならたまにはローマンのところに預かってもらつのもいいかもね？」

冗談めかす口調にカチンときた。じつは電話に出ないことを心

配していたつてのに……。

腹立ち黙り込むと、彼は「もしもし？」と電波の状態を言葉で確認した。

「ディーン？ どうしたの？」

「おれだけか？」

「えつ？」

「寂しさを感じているのはおれだけなのか？ きみは平氣なんだな、おれがいなくとも。そういうえば、こっちに来てからとこいつの、電話をかけているのはおれの方からばかりだしな」

「いつたい何を言つてるの？」

「おれとローマンが似合いだとか、たとえ芝居でも、きみの口から聞きたくなかった。てっきりおれの味方をしてくれるものと思つたが、それは間違いだつたんだな」

惨めな気持でそう言つと、ポールは「ちゅつと落ち着いて」と、おれに冷静さを求めてきた。

「わつきのレストランでことを言つてゐるんだつたら、あればただのお芝居だ。ぼくは単にローマンに協力してるだけなんだよ。きみじゃなくて、『ローマンに』協力してる。そしてきみも、本来であれば彼に協力してゐるはずなんだ」

「本来であれば？ それはどういう意味だ？」

「だつて、このお芝居を最初に引き受けたのはきみだり？ それなのに文句ばかり言つて、ちつとも彼に協力的じやない。気持ちはわかるけど、あれじゃローマンが氣の毒だ」

「ローマンが氣の毒だつて！？ おれは氣の毒じやないのか！？」

ポールは「あのね」と、あきれたよつに言つた。「きみは被害者じゃないよ、ディーン。きみは“共犯者”なんだ。嘘が嫌だというのなら、最初から引き受けるべきじゃなかつたね。最後まで責任を持つことができないつてのなら、それはいいとして、最低限“責任を放棄する責任”を負つことは忘れないで」

責任を放棄する責任を負つづ。それはつまり『またしてもローマ

ンに貸しを作ることになる』ってことだ。

「ローマンがきみにしたのは、確かに馬鹿げた頼み事だけど、約束は約束だ。今のきみは……」『こう言い方はあまり好きじゃないけど、あえて言わせてもらひつよ。今のきみは男らしくない』と思つ「男のおれが、男の恋人から、男らしくないと言われた。これでショックを受けない男はいないだろう。どれくらいショックかつて、まるで頭にスカッド・ミサイルを食らつたみたいだ。実際に食らつたことはもちろんないのだが、比喩としてはどうかと思うが、ダメージの大きさを現すには適当な表現だと思つ。』『で、どうかな。今から泣いていい？』

『ドンドンとクローゼットの扉を叩く音がし、続け「あなた、今夜はそこで寝るつもり？」』と声がした。

『できればそうしたい』といつ憎まれ口を心に收め、おれは「すぐ出る」と返事をする。まつたく、『クローゼットで眠れたらしい』と想むなんて、哀れの極みだ。

「ポール、そろそろ……」

「うん、聞こえた。でも最後にひとつだけ言わせて。』うちから電話をかけないのは、きみがローマンのところにいるからだよ。ベティがいるところで、ぼくからの着信が毎晩あつたら困るだろ？だからこつちは、きみからかかってくるのを待つしかないんだ。それつてどんな気持ちかわかる？』

『そうだつたのか。言われてみれば簡単なことだ。このところの心労から、おれはいつしか疑心暗鬼に陥つていたらしい。』

『ティーン、ぼくはきみを愛してるし、きみもぼくを愛してる。ぼくらの間には何の問題もないよ』

おれが不安がつてていること、ポールはすっかり見抜いていた。こうなると妙に恥ずかしい。怒られ、諭され、慰められる。これじゃまるで子供だ。うん、そうだ、ここ数日のおれはかなり子供っぽかつた。男らしくないどころか、大人らしくもない。ポールがレストランでおれに向けたのは、軽蔑の眼差しだ。あの時点で振られても

おかしくなかつたわけだが、ポールはまだおれを愛していると言つ。これが希望でなくて何なのだ。

ラザロのようになにクローゼットから出ると、ローマンが軽蔑の眼差しでこひらを見ていた。畏れるなディーン、ただひとつ愛を胸に、おまえは死をも乗りこえた（比喩的な意味でだが）。たとえ妖怪変化に身体をまさぐられようとも、魂だけは清らかでいることができる。

「ベティはどうした？」

「寝たわ。疲れたみたい。あたしたちももう寝ましょ。」

ローマンはシーツにスルリと身体を滑り込ませた。

「なあ、あのわ」

「なあに？」

「人の親にこいつ」とは言いたくないけどな。きみのママは異常だ。彼女があれの電話の履歴をチェックしたこと、知つてたか？「彼はおれに背を向け、「だから言つたでしょ、『あたしのママはおつかない』」つて」と言つ。

「きみはよく平氣だな。おれだったらとても耐えられない」

「平氣じゃないけど、慣れたの」

「それで調子を合わせることを覚えたつてわけか？ こんな突拍子もない嘘をついてまで？」

「嘘はママがここにいる間だけよ。帰つたら『ディーンとは別れた』とか言つて、話をつくるわ」

「本当に？」と、彼の顔を覗き込む。

「まあ、たぶんね」ローマンは目を逸らした。

嘘だ。彼は嘘をついている。しかしここでそれを糾弾したところで、態度を硬化させるだけ。ものをうまく運ぶにはタイミングがある。今はまだその時じゃない。

グッド・モーニング、マンハッタン！

もう腹をくくつた。おれは今日からローマンの恋人だ。世界一の愛を捧げよう。誰よりも幸福だと彼が思つほどの愛を。

言つておくが、これはローマンのためでも、ベティのためでもない。ポールのためであり、おれのためだ。自分の彼氏は男らしくないなんて、恋人に思わせるわけにはいかない。おれの愛はローマンを通し、ポールへと注がれる。すべての道はローマン（ン）ではなく、ポールへと通ず。とんだ寄り道もあつたもんだ。

野菜をジューサーにかけるローマンに、笑顔で「おはよっ」と声をかける。

「まあ、今朝は二〇二〇顔じゃない？　ずいぶん『機嫌ね？』『きみみたいな素敵な恋人がキッキンにいて、笑顔にならないとしたら表情筋が壊れてるな』

おれは背後から、彼の耳にキスをした。演技の口ッはローマンをポールだと思うこと。全力であたれば、きっとそう難しこじじゃないだろう。

「恋人はとても優しいし、仕事は順調。これで楽しくないなんて言つたらバチがあたる」

ベティに聞こえるよつこいつ言つて、またキス。

「あのね、言つとくけどママはまだ寝てるわよ」

「なんだ、そうか」

無駄な芝居をしてしまつた。しかしリハーサルとしてはまずまずの滑り出しだ。

「どうしちやつたの。急に優等生になつちやつて」

「別に。ちょっと本気を出したまでだ」

「最初から出してくれりやよかつたのに……まあいいわ。協力的になつてくれて有り難いこと。こういうのをあたしは望んでいたのよローマンはニンジンをジューサーに放り込んだ。

「可能な限り協力するよ。そのかわり、きみもおれに協力してくれ

「あたしが何を？」

「調子に乗つて馬鹿なことをおれに要求しないで欲しい。ポールがするみたいな分別を持つて恋人に接して欲しいんだ」

「分別ねえ……難しいけど頑張つてみようじゃないの。素敵な彼氏のためですものね」

「よく言つよ、こんなときばかり素敵とか」

「あら、そんなことないわ。素敵だつてことは前から認めてるもの。悔しいけどね。さつきだつてとても自然にキスされてドキドキしちゃつたくらい。あ、ここはポールには内緒ね」

慌てて付け加えるローマン。その様子がおかしく、おれは笑つてしまつた。

「まあ、なんだかい感じじゃない？ これにて仲直りね？」

「そうだな。あとはきみのママが帰る日まで、うまくやり過ごすだけだ」

素晴らしい平和協定がここに結ばれた。最初からこうすればよかつただろ？ それは無理な相談だ。ブッダもイエスも悟りを開くまでには、ある程度の時間を要したんだ。たつた六日で光明を得たおれは、かなり物わかりのいい方だと思つ。

ローマンをポールだと思つて接してみて、気づいたことがある。おれは普段、恋人に対して、こんなにもベタベタしていたのかということだ。

意味なく後ろから抱きついたり、風呂上がりに髪の匂いを嗅いだり、テレビを見ていて、突然頬にキスしたりする。人前ではここまでしないが、一人きりのときは隙あらばという感じで愛を現しているのだ。もしかしたらおれは、ローマンが指摘するよつてツンデレでムツツリなのだろうか。こうなつてみると否めない気がする。しかしこれら一連の“やや過剰な表現”は、ローマンと、とりわ

ケベティには評判がよかつた。おれたちがくつついているのを見て、「素敵な男の子たちが仲良くしているのを見るのは、微笑ましいわねえ」とか何とか。それにしても、彼女くらいの年齢でここまでゲイに偏見がない親というのも珍しい。まあ、ローマンみたいな息子がいたら、偏見などは持つていられないのだろうが。それとも“偏見のない親”だからこそ、ローマンみたいな息子が出来たのか？因果性のジレンマについて思いを馳せていると、「あなた、よつやく落ち着いてくれたわね」とローマンが言う。

「こないだまでヒステリー気味だったでしょ、それについて自覚あつた？」

それはもちろんあつた。病院送り一歩手前だと、自分でも分かってた。しかし今“ようやく落ち着いた”ということについては、自覚していなかつた。

どうやらおれは何かを取り戻したらしい。因果性のジレンマを取り扱えるほど、マトモになつた。そしてその途端、物事がクリアに見えてきた。

ポールが指摘した通り、おれは被害者ではなく共犯者だ。共犯といふことは、ローマンの仲間だということ。おれはポールに自分の仲間になつてほしくて、彼をレストランに招いた。しかしポールはローマンの味方。彼はおれが落ち込むほど、見事な芝居をやってのけた。友達が望むのであれば、自分はどうあれ協力する。おそらくそれがポールのやり方なんだろう。

しかし、おれにはとても真似できない。そんなことはやりたくもないといふのが、本当のところだ。軽々しく引き受けてしまったのは、まったくの失敗だが、ここから逃げるよつなことはしたくない。何の因果かおれはここについて、ローマン親子の関係を田の当たりにし、そこに違和感があるのを感じとっている。それなのに何事もないうなそぶりをし、馬鹿な芝居をするなんて真っ平だ。

今のところおれはローマンの“共犯者”。だが、できることなら彼の“協力者”になりたい。ポールがやつたような友情の示し方は

おれには無理だ。だとしたらどうする？　おれは自分の心に沿った行動をする必要がある。誰のことも傷つけず、それぞれが自分に正直でいられる道がきっとあるはずだ。

一日の労働を終え、『ああ、今夜はどんなおしゃべりに付き合わされるのだろう』と覚悟をして帰宅すると、家のなかは想いのほか静かだった。

リビングの明かりが消えていたので、床置きの間接照明を点ける。やわらかな光が、品の良いアールデコのインテリアを照らし出す。悪魔の巣にしちゃ、なかなか悪くない。30年代のハリウッド女優が、衝立の後ろから今にも姿を現しそうだ。

キッチンにローマンがいたので、「ベティは？」と聞くと、「観劇に出かけたわ」とのこと。

「遅くなるそうだから、先に食事を済ませちゃいましょう」
よし、話をするなら今だ。

「あのセ、ローマン。ちょっと話があるんだ」
対面カウンターに呼びかけると、「今、空豆の皮を剥いてるの」とこつ返事。

「手を動かしながらどこにかしら？」と訊くので、おれは「黙だ」と答えた。

「ちゃんと話がしたい。こっちへ来て座つてくれないか」
ソファの隣を叩くと、彼はピンクの「ゴム手袋をはめたままやってきて、おれの膝の上にここんと腰を下ろした。

「セ、じやない」と言つと、彼は「やーね、ジヨークよ」と、ひらり身を翻し、「ゴム手袋を脱いで隣に座る。

「で？　話つて？」

「きみと母親のことだ。きみたちの関係はそれでいいのか？」

「何が？」

「今度のことは“ジョークよ”じゃ済まされないぞ。きみはきみの大切な人をあざむいてる。それについて何とも思わないのか？」

「あざむく”なんて大げさ」顔の前で手を振り、「あたしとママはうまくいくてるわ」と言ひ。

「ああ、そうみたいだな。でもそれは嘘の上に成り立つてる。騙されてることをベティが知つたらどう思つ? きっと悲しむに違いない」

「だからあなたに協力してもらつてるんじゃない。嘘がバレないよう、上手くやつて頂戴つて」

ローマンはおれに向かつて、わざとらしく唇を曲げてみせた。話の矛先がこっちに来たが、ここで論点をすり替えられるわけにはいかない。

「“うまい嘘のつき方”なんてどうでもいい。おれは“きみが親に嘘をついてる”ってことについて話してるんだ」

「自分だつて親にゲイを隠してたくせに、偉そつと言わないでよ」「だからだよ、ローマン。おれは経験からモノを言つてる。隠し事つてのは人を疲労させる。偽りを守り続ける労力ときたら、精神を蝕むほどだ。嘘をつくことは、それがもたらす報酬と比べて、割に合わないもんなんだ」

ローマンはテーブルに放り投げられたゴム手袋に視線を据え、無言でおれの話に耳を傾けている。彼は馬鹿じゃない。この正論が心に響かないわけがない。

「なあ、ディステイニー。きみは見た目もハートもどびきりの奴だろ。下らない嘘で、きみの黄金のオーラを壊らせちまつてもいいのか?」

そっぽを向いている彼の顔を覗き込み、手を取つて指先にキスをする。それは気持ちを深く伝えるべくの表現で、作為はこれつぽつちもなかつたつもりだが、ローマンはそうは取らなかつたようだ。おれの手からつるりと抜け出し、「色じかけは悪くないけど、結局のところ、自分がこの役目から解放されたいだけだよ」と、膨れ

面。

「きみのことを思つて言つてるんだ」

「じゃあ、『思い』だけ、有り難く受け取つておくれ。それ以外は

“ノン・メルシー”よ

おれの好意をフランス語で退け、ローマンは『ム手袋を握んでキツチンへと消えた。説得は見事失敗。おれは本当にこの手のことが苦手だ。

明日はベティが帰宅する日。最後の『ディナー』は、どびきりの中華料理店をローマンが予約してくれた。北京ダックにヒラメの蒸し物、カニとエビの丸揚げ、小龍包にフライド・ヌードル。このあたりは順調だったが、鶏の足のスープと、ブタの足のローストが運ばれてきたときのベティの顔。『あなたたち、いつもこんなものを食べるの?』と言わんばかりに、給仕係を見るので、おれたちは笑つてしまつた。ローマンはベティを驚かそうとして、わざとこの奇妙なメニューをオーダーしたのだ。

料理はどれも素晴らしい味で、誰もが舌鼓を打つた。三人一緒の食事はこれが最後だ。嫌な役割から解放されることは嬉しいが、浮き立つような喜びは感じられない。ローマンは罪悪感など、これっぽっちも感じていらないのかもしれないが、おれはどうにも心が重い。かなり変わつてはいるが、ベティはゲイに偏見のない、息子思いのいい親だと思う。騙していい人間と、騙してはいけない人間がいるとすれば、ベティは後者だ。今夜の宴が楽しくあればあるほど、おれは嘘の存在を意識してしまつ。できればローマンに正直になつて欲しかつたが、それは“ノン・メルシー”、無下に断わられた。『ラクダに水を飲ませることはできない』とは、ローマンがよく口にする台詞で、それは『本人が望まないものを、周囲の者が無理にさせようとしても無駄』という意味だ。人は変わることができるが、

人を変えることはできない。おれはローマンに水場を提供することはできるかもしれないが、水を飲むかどうかは彼が決める。嫌がる者の首根っこを掴んで強要したとしても、振り払われるのがオチだろう。だいたい、そんなことが可能であれば、もうとっくに実践して。そう簡単に変えられないからこそ、おれはここでおかしな立場に立たされてるんだ。

たっぷり食べた後には、おなじみのフォーチュン・クッキーが振る舞われる。ベティが割ると、19世紀末の偉大なる芸術家の言葉が飛び出した。

心に愛を保て。愛のない人生は、日光のない庭のようなもの。花は死んでいる。オスカー・ワイルド（Keep love in your heart. A life without it is like a sunless garden where the flowers are dead. Oscar Wilde）

ベティは目を細め、「美しいわ。まさしく真実ね」と、クッキーを頬張った。

お次はローマン。「あつは！ あたしの最高！ ほら見て！」と笑い、占いの紙を差し出す。そこにはこう書いてある。

神も[冗談]が好きである。アリストテレス（The gods too are fond of a joke. Aristotle）

「アリストテレスもなかなか言つわね。きっとこの言葉を思いついた日、彼は振られたんじゃないかしら？」

面白い格言だが、今のおれには皮肉に聞こえる。冗談好きの神のせいどころになつてているのだとしたら、率直に言つて、おれ

はそいつを恨みたい気分だ。

「ディーンはどんな？」

ローマンがそう訊くので、おれは紙切れを見つめながら「“ ひつ
きのヌードルには毒が” 」と答えた。

「もう、馬鹿ばっかり。どれ、あたしが見てあげる」

おれの代わりにクックキーを割るローマン。読み上げ、「シンプル
ね」と感想を述べた。

それは確かに、ひねりも何もないシンプルな格言。文豪の言葉はお
れの胸にチクリと突き刺さった。

迷う時には真実を話せ。マーク・トウェイン (When
i n d o u b t , t e l l t h e t r u t h . M a r
k Twain)

『どこかでちやんと見ている神は、的確なポイントでメッセージする。
どうやら本当に冗談がお好きらしい。』

『迷う時には真実を話せ』。嘘をつき続けることを選ぶのはローマ
ンの選択で、彼はそこに迷いがない。迷っているのは誰だ？ ロー
マンでもポールでもベティでもない。おれだ。なんてこった、葛藤
しているのはおれだけじゃないか！

ローマンはこの状態を問題とは思っていない。問題視していない
のだから、何も変えたがらないのは当たり前だ。彼には居心地の悪
さも葛藤もない。それを感じているのは、おれひとりだけ。だとし
たら、一体どうしたらいい？

それについては、ジョークの好きな神が答える。

『一体どうしたらいいかって？ それはもう言つたと想ひなが
い』

長い長い一週間だった。どんな悪いことも永遠には続かないとい

う証明が、今ここに成されようとしている。ベティは今日、マンハッタンを離れる。ローマンは依然、この街に住み続けるが、それはさほど問題にはならない。おれが今よりもっと注意深くなつて、彼からのアフタヌーンティの誘いを断わればいいだけだ。ラガーディア空港はただの空港だが、この日をもつてして希望の象徴となるだろ。災いから手を切り、人生を新しくやり直すシンボルだ。

搭乗手続きをしているベティの背を見つめながら、おれはローマンに「別れるつて話、してくれるんだろうな?」と聞いた。

「何のこと?」と、彼は答える。

「後日、きみのママに、"ディーンとは別れました" って報告してくれるんだろう?」

「そうねえ……」

「おこ!」

「今ここで急いで決めなくともいいでしょ。今日はまだ、あたしたち“お付き合いしてる”んだから」

ローマンはブイと顔を背け、おれの視線を避けた。駄目だ。こいつは“別れた”と言つつもりはないんだ。飛行機が出るまでに時間はまだある。それまでに彼を説得できるだろ? 普通に考えて、それはかなり難しい。一週間かけてできなかつたことを、なんで一時間で出来ると思つ?

ベティのメアドを聞き出して、一ヶ月後くらいに『おれたち別れました』と送つてやろうか。しかしそれは無理がありすぎる。別れたことについて、ローマンから連絡がないのは不自然だ。おれから彼女に報告する義務はない。

悶々と考えていると、突然ポールが現れた。幻ではない。本物の彼だ。

「よかつた、間に合つた」と息つく彼に、ローマンは「わざわざお見送りに来てくれたの?」と驚いた様子。

「それもあるけど、ディーンを迎えてきたんだ」とポール。おれを見、「ここから一緒に帰つて、休日の午後を満喫しようと思つて」

と言ひ。

「ああ、ポール！　きみはなんて最高の恋人なんだ！！！　力一杯抱きしめてキスしてやりたいが、それはまだできない。もうあと数時間の辛抱だ。」

手続きカウンターから戻つたベティは、「わざわざお見送りに来てくれたの？」と、息子と同じ台詞を言つた。ポールは質問には答えず、「これ、よかつたら」と、紙袋を彼女に差し出す。

「なにかしら……まあ、チヨコレートね！　うれしいわ、ありがとう！」

キスせんばかりに喜ぶベティ。おれはポールに「気が利くな」と、ささやいた。

「だつて機内で出るチヨコレートは美味しいくない。でしょ？」

「並んだか？」

「そうでもない。けつこいつ空いてたよ」

「おれの分は？」

「そう言つと思つた。ちゃんと買つてあるから安心して」

ふと氣づくと、ベティがあれたちを見つめていた。目をしばしばさせ、「なにか……あなた方、とても仲がいいのね？」と言つ。しまつた、少し親しすぎたか。ポールも同じことを思つたらしく、ぱつとおれから離れ、距離をとつた。見ると彼は悲しげな顔をしている。こんな表情を恋人にさせるなんて、おれは彼氏失格だな。

ローマンは氣まずい空気を取り繕おうと、オーバーに笑みを作り、「それはね、ママちゃん……」と話し始める。その唇から嘘がこぼれるより早く、おれはこう言つた。

「ローマン、もう無理だ。これ以上、騙し続けることはできない」
ポールの肩を抱き、「本当のことをここに言つよ」と宣言すると、ポールが小声で「ディーン？」と言つた。おれは肩を抱く手に力を込め、「大丈夫だ」と、彼の耳にささやく。

「ちょっと……ちょっと待つて、ディーン。あなた……ねえ、落ち着いて」そう言つたのはローマンだ。見ると、彼は目をまんまるに見

開き、“何を言い出すの！？”という顔をしている。

「ローマン、おれは落ち着いてるよ。むしろこれまでにない以上にね」彼に歩み寄り、「きみの母親がいる今、はつきりさせておきたい」と、彼女を見た。ベティはキヨトンとしていて、何が起きているのか、まるでわかつていいようだ。おれはローマンに向き直る。「おれたちの付き合いは終わってた。それはローマン、きみもわかつていただろう？きみはベティのために、おれたちが上手くいつているフリをしていた。でももう無理だ。そんなことはやめなけりやならない」

唖然とするローマンを無視し、おれは続けた。

「おれはポールが好きなんだよ。自分でもどうしてこんなことになつたのか分からぬけど、しばらく前から彼のことを愛してる。ポール以外の男は田に入らない」

そこで言葉を切ると、自分の言つべきことが終わったのがわかつた。わずかの沈黙の後、口を開いたのはローマンだ。

「ええ、わかつていたわ……」そつと田を伏せ、息を吐き出す。「あなたの言つ通り。わたしたちの関係は終焉を迎えていたのよね……。あなたを愛するあまり、わたしは盲目になつてしまつていて。あなたたちが惹かれ合つていることは明白だったというのに……」妙にしつとりとした口調。田にはうつすら涙まで浮かべていて。なんてノリがいいんだろう。即興でここまで演じられるとは、かなりの役者だ。こつちも負けてはいられない。お届をしかけたのはおれの方だ。

「ごめんよ、ローマン。許してくれとは言わない。でも自分の気持ちは偽れない」

真摯にそう言つと、第三の登場人物が舞台上に登場。「ティーン、あなたなんてひどいことを……」ベティは頭を左右に振りながら、裏切り者に詰め寄つた。「あなたね、こんな素晴らしい子と別れたりしたら、一生を後悔のうちに終えることになるのよ？」

「やめてママちゃん、おれとベティの間にローマンが割つて入る。

「あたしはここ。潔く身を引くわ」

「ローマンちゃん、あなたそれでいいの？ 本当に？ 渡せ我慢をしているんじゃなくつて？」

「ねえ、ママちゃん。あたしはディーンを愛しているの。眞の愛を今でも彼に捧げていのよ……」

潤んだ瞳をおれに向けるローマン。完全に自分に酔っている。濡れたまつ毛は、砂漠のラクダによく似ていた。

「彼を愛してる……ディーンにはこいつだけ心のままに生きて欲しい。束縛なんてしたくないし、できっこないわ……」

よく言つよ！ この一週間といつもの、おれを精神的にも物理的にも束縛しまくつたくせに！

『どの口が言うんだ？』と脣をひねり上げてやりたいところだが、ここはローマンのひとり舞台。黙つて成り行きを見守り。名優ディスティニーはやや明るい声音で「それにポールはとてもいい子だもの」と、ポールを見た。「あたしは失敗しちゃったけど、きっとディーンとうまくやれると思うの」

ポールは小ちく苦笑している。彼もまた、黙つて成り行きを見守ることに決めたらしい。

ローマンはおれに視線を戻し、歌うような口調で台詞を回し始めた。

「ディーン、誰よりもあなたの幸せを祈るわ。それがわたしの心から愛……」

どうやらここがクライマックス。ブロードウェイ・ミュージカルもかくやのドラマチックさだが、おれは少しも感動できない。これまでの経緯から言つて当然のことだが、ベティはそつじやなかつた。“これまでの経緯”を知らないわけだし、とにかくやたら息子を愛している。彼女もまたラクダの目になり、「私の息子は何て寛大な心を持っているのかしら……」と、つぶやいた。

「ローマンちゃん、ママは本当にあなたのことが誇らしいわ」「ありがとう、ママちゃん。わかつてくれて嬉しいわ

ほんと、わかつてくれて嬉しい。でなきや、芝居を打った甲斐がないもんな。素晴らしい舞台だったけど、カーテンコールは無しでいいぜ。

後は楽しい午後を夢想するばかりのおれの胸に、ローマンが手を置いた。

「ディーン、最後にひとつだけお願ひ。お別れのキスをして頂戴「なに！」？

「さよならだけでは寂しそぎるわ……せめて素晴らしいキスを……」
今度はおれが、『何を言い出すんだ！？』という顔をする番だ。
キスだつて？ 今ここでか？ ベティが見ているのに？ ポールも
いるのに？ ここは空港で、芝居の舞台じやないのに？ ローマン・
ディスティニーにキスしろってのか？ そんなことは舞台でどこで
も御免だ！

冷や汗をかくおれを、ローマンが、ベティが、ポールが見つめて
いる。（ついでに言えば、横のベンチに座っているカップルも、さ
つきからおれを見つめている）

クライマックスはさつきのシーンはじゃない。本当のクライマッ
クスは今だ。とてつもないバッドエンドの予感がする。

おれは決意し、殉教者のようにローマンに進み出た。彼の頬に手
を置き、そつと顔を近づける。軽くチュッとやるつもりでそうした
のだが、目の前の男はそれを知つてか、おれの両頬を力強く掴み、
しっかりと固定してきた。そこから先の展開は……ああ、神様……
思つた通り、ローマンは思い切り舌を絡ませてきた。ここで退いた
ら男じゃないと思ったが、むしろ男だからこそ退きたいのだと思つ
直す。しかし後戻りはできない。おれはローマンの身体を抱きしめ、
キスを返した。人間、死んだ気になれば何でもできる。といふか、
死んだ気にもならなきや、とても耐えられそうにない。

ラガーディア空港はただの空港だが、この日をもつてして悪夢の
象徴となってしまった。災いがおれを襲い、口づけを強要する。時
として、己が力ではどうすることもできないようなことが、人生に

は起こりうる。友人の選択について、本氣で考え直した方がいい時期に来ている気がした。

ローマンがイニグレーシヨンまでベティを送り届けている間、おれとポールはベンチに座つて話をした。久しぶりに一人きりになつたというのに、ポールは笑いが止まなくなつてゐる。理由はもちらん、さきほど名場面だ。

「まさかあそこまでやるなんて」とポール。「どうこう展開になるのかハラハラしたけど、心配することなかつたよ。ベティはきみたちの関係について、未来永劫、疑うことはないんじやないかな」

「心配することなかつたって？ あれが心配の対象じやないとしたら、きみはおれの死体を発見しても“心配することなかつた”って言いそうだな」

「だつてローマンは本当に信頼できる奴なんだ。きみがどう思おつと、それは真実だよ」

「どうやらきみの真実とおれの真実は違うらしい。あいつはおれをレイプするつて脅したんだぜ？ どんなに怖かつたかわかるか？」

「きみは押し倒されたら抵抗できなそつだからなあ。その点だけは心配だよ」

「ちよつと待てよ、なんでそつなる？ きみはおれの弱さを懸念してるつてのか？ ローマンの性的暴力でなく？ だいたい、おれが他の男とキスしたつてのに、ずいぶん冷静じやないか。いつもだつたら大騒ぎするシチュエーションだつに、よく平氣でいられるな」「だから言つたろ。ぼくはローマンを信用してる。それにさつきの愛の告白があつたから」

「告白？」

「“ポール以外の男は田に入らない”つて」

「ああ、それか。もちろんだ。他の男つていつたい何だよ？ ロー

マンはそつとう美形だけど、おれは決して惹かれたりはしないし、
だいたい……」

「ね、もうこいよ。ぼくはきみのことも信じてる。ローマンになび
くことはあり得ない」とも知ってる。だから今回の件は、ぼくにと
つてはそう大したことじやなかつたんだよ」

おれにとつては大したことだ。本当に馬鹿げた日々だった。

「でもまさか、あんなキスをするなんてね……」

またも思い出し笑いをするポール。こつちは涙目だつたというの
に、彼にとつては笑い話でしかないようだ。でもそれでいい。泣く
のはおれだけで充分。ポールにはいつも笑つていてほしい。（欲を
言えばおれが泣いていないときにも笑つていて欲しいが）

笑うポールの顎に手を置き、「口直しに……」と唇を重ねる。久
しぶりの恋人とのキス。心から愛を送り合う本物のキスだ。一週間
前までは当たり前のようにしていた行為だが、ここへきてグッと価
値が上がつた感じがする。

唇を離すと、ポールは「これつてローマンと間接的にキスしたこ
とになるのかな？」と聞いてきた。

「間接ぐらいいいだろ。おれなんか直接だぞ」

不機嫌にそう言つと、彼はまた笑い出す。

「ねえ、でもや、きみはローマンを苦手としているみたいだけど、
彼といるのは、きみにとつていい影響もあると思うんだけど

「おれにいい影響だつて！？ いつたい何を言つてるんだ！？」

「だつて、彼といふときのディーンはとても正直だし」

「きみといふときだつて正直なディーンだ」

「うーん、そういうことじやなくで……」ポールはわずか考へ、「

きみは基本的に、思つてることを話すのが得意じやないよね」と言
う。「無口じやあないんだけど、あまり自分の気持ちを口にしない。
否定的だつたり、ネガティブなことは特にだ。でもローマンとい
うと、そんなことはお構いなしにポンポン何でも言つてるから
「別に言いたくて言つてるんじやない。あいつといて黙つてみろ。

おれのことを勝手に解釈されたり、こじよつと利用されるのがオチだからな。」
おれの解説に、ポールは無言でニンマリとした。可愛い顔だが、若干、小憎らしくもある。

「それにしても、ローマンのママがきみのママじゃなくてよかつたよ。あんな姑がいたら、一ヶ月で頭があかしくなりそうだ」「ほくのママはもつと強烈だ。あんなもんじゃ済まないよ」

「……嘘だろ？」

不安がるおれに、ポールは再度、無言でニンマリとするのみ。『今のはいったいどうこいつ意味なのか』と聞くのが怖い。せっかく不幸が去ったと思ったのに、またしても遠くに暗雲を見た思いだ。ベティを送り届け、ローマンが戻ってきた。

「やれやれだわ～！ ほんとに疲れたこと…」大きく伸びをし、「これにて借りは返してもらつたわ。」協力ありがと」と、おれに言ひ。

「冗談じゃない、せんぜん割にあわないぞ。利子が多すぎだ」

「じゃあ今度はそつちの貸しにしてもいいけど」

「いいや、もういい。きみと何かを貸し借りするのは、たとえ空気でも御免だね。あんなキスをするなんて、どう考へたつてやりすぎだ」

「あんたがあたしをびつくりさせるからお返ししたまでです。ポールとすることをカムアウトするなんて、あたしのシナリオになかつたわ」

「でもいいオチだつたろ？」

「そうね。嘘がバレずに、本来の道筋に戻つた。ママはあたしのこど、誇らしげに言つてくれたしね」

おれの隣にすとんと腰を下ろし、「ねえ、ティーン。今回の件はあたしが悪かつたわ」と彼は言つた。「あなたの言つ通り。嘘は疲れし、割に合わないものよ。色じかけまで用いて、あたしに真剣に言つてくれたこと、感謝してるのよ」

「それがわかつていながら、どうして間違いを認めなかつたんだ？」「だつて認めてしまつたら、あなたに協力してもらえなくなるじやない」

なんたる策士。ものの善悪や人情よりも、遂行すべき目的を優先するとは恐るべき男だ。こいつを敵に回すのはうまくない。いや、もし彼に“人情”なんでものがあつたとしても、敵に回すべきじゃない。朝っぱらから股ぐらを掴まれて得た教訓だ。

「まつ、いろいろあつたけれど、結果よければすべてよしよ。キスはできたし、裸も見れたし。けつこう楽しかったわ。ポール、ありがとうね。あんたの彼氏、これにお返しするわ」

「また必要があつたらこいつでも言ひて

「おいっ！」

「冗談だよ。もう絶対に誰にもキスなんてさせないから。他の男にも、もちろん女にも」

その言葉を証明するように、ポールはおれの脣にキスをした。口づけを交わすおれの耳に、ローマンのあきれたような声が届く。
「はいはい、お邪魔虫は退散しますわ。あなた方はキスでもなんでも、ゆつくりしてちようだい」

長すぎるラブシーンを終えると、そこにはローマンの姿はなかつた。悪魔は愛のゲームに鑄溶かされたりじご。いつの時代であつても、恋人同士は最強の戦士だ。

「そういうば、『色じかけ』って何？」とポールが聞く。

「なに、おれがいつも恋人にやつてゐる」と。目を見て、手にキスする。きみにはもう効果がないかな」

「そんなことないと思うな……ちょっとやってみて」

乞われるまま、おれはポールの手を取り、瞳を見つめてキスをした。すると彼は眉間にシワを作り、「そんなことをローマンにしたの？」と、一気に不機嫌になつた。

「どうしてそこで怒るんだ？　おれはローマンからもつとひどいセクハラを受けたんだぞ？」

「ローマンがあみに仕掛けたのと、あからローマンが仕掛けたのと同じ意味が違う」「

立ち上がり、足早で歩き去るポール。おれはその背に向かって、

大声を出した。

「おい、待てよー。ポール！ さっきのキスと同じのをローマンにしたと思つた。今のはきみだからだー。ローマンにしたのよりも、ずっと“本気度”が高いんだぞ！」

彼は少しも歩みを止めない。聞こえてくるはずなのに、わざと無視してゐるんだ。

それがわかつていながら、おれはなぜか腹も立たず、ただポールの後ろ姿を穏やかな気持ちで眺めていた。

わざと無視され、置いてきぼりを食らつてもいい。彼からだつたら、無理難題をふつかけられ、異様なセクハラをしかけれられたとしても、へつちやうだ。眞面目になるのは、愛するがゆえ。間違つているとわかつていても、ついつい愚かになつてしまつ。

後悔するわよとベティは言つたが、この選択に間違いはない。おれはポールを愛しているし、ポールもおれを愛してくれていて。おれたちの間には何の問題もない。当面、ローマンが登場しなければの話だが……。

END

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。

もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

(制限なしで、感想の記入を受け付けられるようになりました。

『なりう』の登録コーナーでなくても書き込めます。お気軽にご利用ください)

本作品はHULソード24に続きます。更新まで今しばらくお待ちください。

(通販は<http://www.naruu.comcart.fc2.com>)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7954v/>

ニューヨーク・ラブストーリー/エピソード23:偽りの恋人 (Rescue Me)

2011年8月19日03時20分発行